

テングチョウの多発(芦屋市の例) 西 隆広

本年(2001年)は、当地方ではテングチョウ(*Libythea celtis*)の多発の話をよく耳にした。この現象について、兵庫県芦屋市の状況を報告する。

* * *

2001年は確かにテングチョウの成虫の数は多かった。しかし芦屋市では2000年も多発しており、発生地の一つである高座川(芦屋川支川)では、同年極めて多数の蛹を確認している。その数は例えば、発生木周辺のササの葉裏の多くに蛹が付いており、中には1枚当たり数個の例が見られるほどであった。それに対して2001年の蛹は、2000年ほどの数は見られなかった。観察結果で見ると、上記発生地での発生数は2000年が2001年を上回っていた。

2001年には発生地で興味深い現象が見られた。5月12日に発生地へ出かけた時、川沿いのエノキのすべてが真冬のように葉を失っているのを見て驚いた。気づくのに遅れて、エノキが葉を失った原因は確認

できなかったが、テングチョウの幼虫が食べ尽くしたのではないかと思う。

この推測が正しければ、テングチョウの幼虫の多くは蛹化前に食すべき葉を失い、その結果幼虫の一部は餓死し、また葉を失った樹上では幼虫は目立つため鳥類などの集中的な補食を受け、相当数を減らすことになったであろう。そのために蛹化に至る個体が減少したと考える。また本年は成虫の矮小個体が目立った。幼虫多発による摂食量不足が一部で起こったためであろう。

高座川のエノキは枯死することなく、その後回復して葉を茂らせている。

* * *

表-1に高座川の1観察区間である三条第二堰堤(標高125m)~高座滝(標高200m)、区間長約600mでのテングチョウの越冬成虫及び新成虫の観察数を示す。

表-1 テングチョウ成虫の最多観察数(高座川三条第二堰堤~高座滝)

年	越冬成虫			新成虫		
	期間：4月上旬~5月上旬			期間：5月下旬~6月上旬		
	最多観察頭数	最多観察月日	期間観察回数	最多観察頭数	最多観察月日	期間観察回数
1993年	8	5/09	4	9	6/09	2
1994年	17	4/17	4	27	5/28	1
1997年	5	4/19	5	0	---	2
1998年	1	4/05	6	0	---	1
1999年	2	4/17	3	---	---	0
2000年	22	5/04	7	38+数百	6/04	2
2001年	66	4/28	7	275	6/03	3

備考) 観察時刻は概ね正午頃である。

新成虫の中に一部越冬成虫が含まれる場合がある(表-2参照)。

1997年、1998年の新成虫は0となっているが、当該観察区間外では少数を観察している。

表-1では越冬成虫の観察期間を4月上旬~5月上旬、新成虫の観察期間を5月下旬~6月上旬とし、その期間で観察数の最多頭数及びその観察の月日を示す。但し観察回数が“1”の年は、その1回の観察数を最多観察数としている。

同表からは、越冬成虫の多く見られる年は新成虫の発生数も多くなるという当然の傾向が読みとれるが、食樹となるエノキの葉の量との関係で限界を超せば、発生数は抑制されるということを示しているであろう。しかし、現在までのところ、なぜ成虫多発と言う現象が起こったのかは分からない。当該発生地に関しては、問題は2000年の成虫多発の原

因である。成虫発生数を左右する要因は、母蝶群の産卵総数であり、成虫に達するまでの各ステージでの病死数、寄生数、補食数であろう。ただ、産卵数、幼虫数が多量になると伝染性の致死性細菌やウィルスに感染することによる大量減数以外は、昆虫系の寄生者、捕食者の側にも必要の限界が生じ、結果的に寄生率、補食率の低下が現れるのかも知れない。そうすると第一の問題は母蝶群の産卵総数の変動要因、或いはその前段階の成虫が越冬し繁殖に参加するまでの生存率の変動要因ということになりそうだ。後者に関しては、気象を含む環境的条件の変化などが考えられるが、現在まで不明である。今後の課題で

ある。2001年に関しては、上記各要因の他にエノキの葉の総量が成虫発生数に関係したようだ。表-1では2000年6月4日の観察頭数を“38+数百”としているが、これは野帳の記載そのもので、実際には観察ルートの路上で観察した頭数が38、また三条第二堰堤上流の広場に吸水に集まっていた頭数が数百となっている。これは、堰堤上流に集まった数があまりに多すぎてカウントを断念したためであり、今思えば時間を掛けてでも、より正確な概数のカウントを行っておくべきだった、と反省している。なおその状況を撮影しているが、写真では450頭程カウントできる。1000頭以上集まっていたのかも知れぬ。

ところで、表-1の新成虫の最多頭数はかなり不確かな要素を含んでいる。観察日によって頭数の変動が大きいからである。これは、観察日の天候など

の影響の他にも、新成虫は羽化後しばらくは付近に止まるが、その後急速に分散していくらしいことから、ピークを含んだ連続的な観察の結果でない表-1の最多頭数はあくまで参考値である。これに関しては、2000年6月4日の状況は写真記録で一部状況確認ができるが、その中では羽化途中、直後の新成虫が多数見られ、また羽化までに1日以上はかかりそうな緑色の蛹も見られる。それらはカウントしていない。ルートでの種別カウントは通常の歩行で観察できる成虫の数としているためである。

発生地における成虫の観察数の変化に関して、参考までに2001年5月中旬以降6月にかけて、当該区間を訪れた全観察でのテングチョウの観察頭数を表-2に示す。

(NISHI TAKAHIRO 芦屋市川西町3-4)

表-2 2001年の観察数の変動

月 日	観察頭数	備 考
5/20	36	越冬成虫17頭、新成虫19頭
6/03	275	最多観察頭数(一部越冬成虫を含む)
6/09	25	一部越冬成虫を含む
6/10	21	同 上
6/17	8	

アオマダラタマムシ、オオムツボシ タマムシ神戸市内での記録 山本 勝也

筆者は県内での採集例が少ないと思われるタマムシ科の2種の標本を所蔵している。そのデータをここに報告する。

1. アオマダラタマムシ *Nipponobuprestis amabilis* (Snellen van Vollenhoven)

神戸市北区君影町君影小学校内

1ex. 21.VIII.1998 山本哲也採集

神戸市須磨区離宮西町北須磨小学校内

1ex. -.VI.2000 太田順江採集

同所 1ex. 4.IX.2000 山本剛史採集

神戸市須磨区須磨寺町須磨寺境内

1ex. 8.VIII.2001 山本こずえ、さなえ採集

2. オオムツボシタマムシ *Chrysobothris ohbayashii* Y.Kurosawa

神戸市須磨区須磨寺町

1ex. 26.IV.1999 山本勝也採集

どの個体も偶然に採集されたもので、発生木の確認には至っていない。

最後に発表をお勧めいただいた高島 昭氏、各標本

をご提供いただいた各氏に深くお礼申し上げます。

<参考文献>

高橋寿郎(1998):兵庫県のタマムシ(1)

きべりはむし第26巻第1号 p.15-18

(YAMAMOTO KATSUYA

神戸市須磨区須磨寺町2丁目1-1)

神戸市須磨区におけるギフチョウの記録 山本 勝也

筆者は神戸市須磨区内において、偶然にもギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech を採集しているので、ここに報告する。

神戸市須磨区離宮西町

1ex. 7.IV.2001 山本勝也採集

筆者の知る限り採集場所周辺には食草となるカンアオイ類の自生場所はなく、本種が生息するような環境は見当たらない。本個体はおそらく放蝶されたものではないかと思われる。

(YAMAMOTO KATSUYA

神戸市須磨区須磨寺町2丁目1-1)